

エッセイ 創作「害虫折り紙」のはなし

アース製薬株式会社

平岡 浩佑 (ひらおか こうすけ)

家庭用の殺虫剤などを扱うメーカーに勤めて十数年になる。勤務地の坂越(さこし)工場・研究所(兵庫県赤穂市)は、海と山に囲まれた風光明媚な所に立地している。この街は昔から名産の塩と「忠臣蔵」の物語で知られ、最近では地域特産の牡蠣が冬の味覚として人気となっている。

研究棟には虫の飼育施設があり、古くから試験に使っている衛生害虫の蚊やゴキブリ、最近強化している家庭園芸部門にかかわる各種昆虫類に加え、試験用ではないが見学者向けにクワガタ、スズムシ等も飼育している。施設の一部は公開しており、時々来客者を見学コースに案内することもある。私の仕事は異業種への技術協力などで、家庭園芸部門に直接かかわることは少ないが、植物の病害虫の関係ではこれまで、山林のカシノナガキクイムシ粘着シートなどを扱った。

このような職場で毎日害虫と向き合ううち、ふと折り紙で害虫が折れれば面白いのではと思い立った。かつて本を見て作っていた折り紙の折り方を応用して、害虫をかたどった作品をいくつか創作してみた。節足動物は脚など突出した部分が多いため、正方形の紙を折るだけで表すのは難しい。1枚で完成すれば理想だが、作品によっては2~3枚を組合せる場合もある。あるとき、ムカデやゴキブリ等の折り紙を作ったところ評判がよく、見学コースに展示してもらった。嬉しいことに、最近では時おり見学者からも関心を持たれるようになっている(図-1)。

折り紙を始めたのは小学生ごろからである。最初に作っていたのは「やっこさん」などで、その後、折り鶴の連なった「連鶴」をよく作った。折り紙は、ほぼ直線的な折り筋だけで人工物のみならず自然物も表現できるのが奥深く、また面白い。題材や作り方が多様なので、新しい分野を見つけるたび断続的に趣味として続けてきた。折り方を試行錯誤し確立した後でも、その作品を改めて作るには手間がかかる。複雑なものは1時間位も要し疲れるが、それなりのものができ上がれば一人悦に入っている。

そんな日々の中、石川県に「折紙博物館」なる施設があることを知り、旅の途中で訪れた。そこでは建物や人

物等をかたどった作品に混じって、昆虫を表現した折り紙が展示されていて驚嘆した。私の作品に比べてはるかに、実物の形状に似せて作られていたうえ、あまり題材になりそうにもないゴキブリまで創作されていたのである。

私も昆虫の種類を増やそうと10種類ほどの作品に挑戦してきた。そのなかから最近作ったアブラムシを紹介したい(図-2)。雌虫体内の仔虫が薄く見えるように作っており、3世代目も入れ子構造にしている。形状の再現ならば折り紙の名手にはかなわないが、生態的特徴の表現を自身の持ち味として、ひとまず満足している。今後、アブラムシは有翅型にも挑戦したい。

折り紙には基本の折り方がいくつかある。私の場合はまずそれらの折り方を使い、何か所もとがった形を作る。それから各々の突起部を折り曲げて、虫の形に近づけている。でき栄えは折り手の技術次第だが、題材として作りやすい虫を選定したか、興味を引く仕上がりを想像できるか、本物をイメージしてそれに近づけられるかどうかの“折り紙眼力”も影響する。折り紙の魅力は、創作として無限の要素を持つとともに、昆虫の翅のたたみ方をモデル化したものが人工衛星のパネルの広げ方に応用されるなど、先進性も併せ持つことだ。折に触れ、折紙講師として、子供たちに手ほどきする機会もある。折り紙は、熟練すればコミュニケーション手段の一つにもなり得る。かといって経験上、特にモテたり出世したりはしないと思うが、老化の防止にはなるかもしれないのでこれからも向上を目指して続けたい。

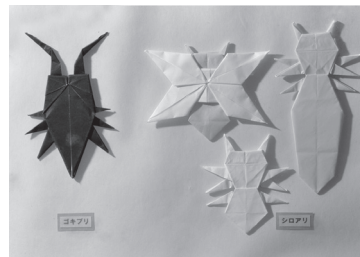


図-1 ゴキブリ(左)とシロアリ

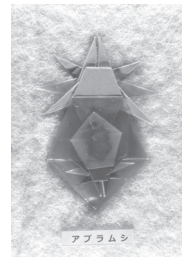


図-2 アブラムシ